

ベートーヴェンへの旅 vol.4

『運命』と『田園』―「絶対音楽」と「標題音楽」の関係とは？

Vol.4を迎えました。いつもお読みくださりありがとうございます。

今回は音楽美学では避けられないテーマを、なるべく具体的に紹介しましたが、それでも後半は難解かも…？

神戸大学大学院教授 / 音楽評論家

藤野 一夫

二卵性双生児の誕生

CD時代になって『運命』と『田園』のカップリングが可能となりました。みなさんの中にも、この性格の異なるワンペアを通してベートーヴェンの広大な世界に足を踏み入れた方は多いと思います。実際、交響曲第5番と第6番の連作初演は、1808年12月22日にアン・デア・ウィーン劇場で行われました。しかもベートーヴェン主催による自作自演、つまり個人リサイタルの枠組みでした。どんなプログラムだったのでしょうか。12月17日付の「ウィーン新聞」には次のような告知が掲載されています（注は藤野による）。

第1部 1.交響曲「田園生活の思い出」というタイトルによるヘ長調（第5番） 2.アリア（注：「ああ、不実な人」Op.65） 3.讃歌、ラテン語歌詞で、合唱と独唱を伴って書かれた教会様式による（注：ハ長調ミサ曲Op.86より「グロリア」） 4.ピアノ協奏曲（注：第4番Op.58）当人が独奏

第2部 1.大交響曲ハ短調（第6番） 2.「聖なるかな」ラテン語歌詞で、合唱と独唱を伴って書かれた教会様式による（注：ハ長調ミサ曲より「サンクトウス」） 3.ピアノだけでファンタジア（注：合唱幻想曲Op.80の前半） 4.ピアノでファンタジア、次第に全オーケストラの登場、最後に合唱が入って終わる（注：合唱幻想曲Op.80の後半）

このプログラムを見て、どのように思われるでしょうか。今日の演奏会プログラムとはずいぶん違ってきますね。当時は「寄せ集め」のような演目が並ぶのが当たり前で、公演時間も現在の二倍におよびました。むしろ異彩を放っているのは第5番と第6番を同時に初演した作曲家の決意でしょう。ベートーヴェンの主催演奏会としては5年半ぶりの第3回目。まさに自らの人生を賭けた歴史的コンサートでした。どんな作曲家でも作品番号(Op.)は後世に付けられますが、興味深いのは「交響曲ヘ長調」つまり『田園』が第5番、「大交響曲ハ短調」が第6番と表記されていることです。それまでの作曲家の作品はジャンルごとに調性で呼ばれるのが普通でしたが、交響曲に番号を付けたのはベートーヴェンがこうし。しかし初演時にはまだ順番が決まっておらず、演奏順に仮

の番号が付いていました。また、ハ短調交響曲が『運命』と呼ばれるようになるのは後世のことですが、『田園』には作曲家自身による標題が楽章ごとに付けられていました。

さて、交響曲第5番と第6番は二卵性双生児にたとえられます。受精(コンセプト)の時期は同じで、一緒に胎児に育ってゆくのですが、もちろん本格的な作曲作業を同時に行うことはできません。そこでハ短調交響曲がほぼ完成した1808年初春から『田園』に取り組み、約半年で完成します。両曲は同時に初演されただけでなく、ロプコヴィッツ侯とラズモフスキー伯という二人のパトロンの(一曲ずつ分割してではなく)二重献呈されました。ここにも両作品の一体性を重んじたベートーヴェンの意図が潜んでいたかもしれません。いずれにしても、自我と意志の世界を自律的に構築した『運命』と、自然に抱かれた人々の感受を表出した『田園』とが同じ時期に成立しました。激しい闘争的モチーフに貫かれた音の構造物とともに、自然のなかに遍在する神との親密な対話が交響曲となったのです。

当時、何かを描く交響楽は「性格的シンフォニア」と呼ばれ、『田園』はこの系列にありました。楽想の素描を始めた1807年夏のスケッチ帳にはこんな言葉が記されています。

ベートーヴェンが『田園』の曲想を練った、ハイリゲンシュタット(撮影筆者・2019年3月)



「ホイリゲ」(ワインの新酒を出すレストラン)



1802年に「遺書」を書いたベートーヴェン記念館



「どんな場面を思い浮かべるかは聴き手の自由にまかせよう。性格的シンフォニアあるいは田園生活の思い出。どんな情景描写も、あまり忠実に器楽で再現しようとすると台無しになってしまう。シンフォニア・パストラーレ。田園生活の想念を持っている人は、たくさんの言葉がなくても、作者が意図することが自ずと分かるものだ。描写がなくても、全体は音による絵画というより感受の表出であると分かるだろう。」

一般に、ハ短調交響曲は「絶対音楽」の原型、『田園』は「標題音楽」の典型と見なされてきました。しかしベートーヴェン自身が、たとえばハイドンのオラトリオ『天地創造』や『四季』に見られる「音による絵画」の要素を一段低く見ていたことは、このメモからもうかがえます。『田園』は器楽によって情景を描写した音画ではなく、田園生活の「感受を表出」した交響曲なのです。また「性格的シンフォニア」という点でも、すでに標題(プログラム)をもった『英雄』に自らの先例がありました。「標題音楽」と「音による絵画」とは分けて考えなければなりません。

ベートーヴェン解釈の分岐点

ところが、1810年にE.T.A.ホフマンの論説『第5交響曲』が発表されると、ハ短調交響曲を「絶対音楽」のモデルとする言説が支配的となり、『田園』の受容もその影響下におかれるようになります。ホフマンは第5交響曲のうちに、一方で「ロマン主義の本質たる無限の憧憬を呼び覚ます」戦慄にみちた巨大な音楽を聴きました。他方では「この巨匠の鋭い構成感覚」を見通すには、音楽の内部構造の鋭利な分析が不可欠であると論じました。

ここからベートーヴェン解釈の二つの流れが分岐します。一方は「感受の表出」と「性格描写」を重視する流れで、リストの交響詩やワーグナーの楽劇に流れ込みます。他方はハンスリックの「絶対音楽」の美学に引き継がれ、ブラームスに至る純粋器楽の流れです。しかしながら、音楽史の党派論争ともなったベートーヴェン解釈の二つの流れは、『運命』と『田園』の一体性にまで遡って再考する必要があるように思います。

『音楽ノート』に刻まれたベートーヴェンの汎神論的自然観の解明が鍵です。「森の全能なるものよ！わたしは森のなかにいると歓びにあふれ幸福です。こういう森のなかに、丘の高みに、神に仕えるやすらぎがある」。ワーグナーは自然に抱かれた「感受の表出」の秘密を、ショーペンハウアー哲学に照らしながら見事に解明しています。

「ベートーヴェンの眼は内側から輝きを発する。彼は現象界にも視線を向ける。その眼光を浴びた現象は、霊験あらたかな反射光を彼の内面へと照らし返す。ふたたび彼に向かって語りはじめた森羅万象は、いまやその真髄のみを伝え、美の静謐な光のうちに姿をあらわす。(…)どんな響きも、その奥に原初の悲しみの核を宿すものだが、それさえもやわらかい微笑みに変わり、世界は幼な子のように無垢な姿を取り戻す。〈汝ら、今日、われとともに天国にあらん〉―『田園交響曲』を聴いて、この救い主の呼びかけ

が耳に入らないものがあるだろうか？」(ワーグナー『ベートーヴェン』池上純一訳)。

かなりの数にのぼる『田園』の録音を改めて聴き比べてみましたが、ゲルハルト・ボッセ指揮＝新日本フィルによるDVDが掛値なしにベストです。考え抜かれたアーティキュレーションと引き締まったテンポの妙。いま生まれたばかりの幼な児の微笑みが光に包まれています。これほど躍動的な「生成の無垢」はありません。ボッセの解釈に唯一匹敵するのは、アーノンクール指揮＝ヨーロッパ室内管弦楽団。「その眼光を浴びた現象は、霊験あらたかな反射光を彼の内面へと照らし返す」という透視力において際立っています。



『ベートーヴェン:交響曲全集』

ゲルハルト・ボッセ(指揮)
新日本フィルハーモニー交響楽団



『ベートーヴェン:交響曲第6番 田園』

ニコラウス・アーノンクール(指揮)
ヨーロッパ室内管弦楽団

交響曲第2番は、アーノンクールと並ぶピリオド奏法の巨匠ガーディナー率いる革命的ロマンティック・オーケストラに軍配を挙げたいと思います。その名のとおり、フランス革命の精神が憑依した鮮烈な演奏に衝撃を受けるでしょう。

トリプル・コンチェルトは、ボザール・トリオの2度目の録音が絶品。クルト・マズア指揮＝ゲヴァントハウス管の小気味良い推進力に支えられて、三重奏が陰影に富んだ掛け合いをみせます。とくに有機的融合の要となるプレスラーの陶然たるピアノズムが聴きものです。



ボザール・トリオとクルト・マズアの録音風景



藤野 一夫 プロフィール

1958年、東京生まれ。神戸大学大学院国際文化学研究所教授。ベルリン自由大学国際高等研究所フェロー。文化経済学会理事、文化政策学会副会長、(公財)びわ湖芸術文化財団理事、(公財)神戸市民文化振興財団理事、日本ワーグナー協会理事他。専門はドイツ哲学・思想史、音楽文化論、文化政策学。近著に『ワーグナー 友人たちへの伝言』(法政大学出版局)、『公共文化施設の公共性』(水曜社)、『地域主権の国 ドイツの文化政策』(美学出版)、『基礎自治体の文化政策』(水曜社)。日経新聞等の音楽批評を担当。